

スイス国際アカデミーで完全復活!

今井信子、原田禎夫、パメラ・フランクらと若手音楽家を室内楽で指導

特別記事

小澤征爾

取材・文 中東生  
Text=Shinobu Naka

スイスでも、美味しいワインの名前で知られているジュネーヴ近郊の小さな村、ロールで5年目を迎えた「スイス国際音楽アカデミー」(以下、IMAS)。小澤征爾が主宰するこのアカデミーの会場となっている湖畔の2件の邸宅は、広い庭と塀に囲まれ、一歩門を入るとすべてを忘れ、音楽に没頭することができる。アカデミー2日目となる6月25日は、小澤へのインタビューから始まった。

「弦楽四重奏がクラシック音楽アンサンブルの基本である」

——ここ、ロールでスイス国際音楽アカデミーを始めたいきっかけを教えてください。

小澤(以下O) 「弦楽四重奏がクラシック音楽アンサンブルの基本である」というのが齋藤秀雄先生の信念で、サイトウ・キネン・フェスティバルを始めた時から、弦楽四重奏をやるうと言っていたんだけど、なかなかできなかったの。そしてらニューヨークのマネジャヤーが、「やりたいのになんでやらないんだ？」って毎年聞くから、「スポンサーが見つからないからできないんだ」って言ったの。そしてらね「スポンサーが見つかるのを待っていたらいつまでもできないから、お金がなくとも始める」って言うんで、奥志賀で始めたの。だから、最初の年は、先生たちはまったく無給。奥志賀ではその前から音楽会やっていたの。もう20年くらい前から。そこで知り合いになって山田の男たちに、「そういうのやるんだったら、ここでやれ」って言われて。中心になったのは杉山さんっていう、昔のオリンピックのスキーマスターの先生で、僕なんだけど、杉山ハイムっていう、3段ベッ

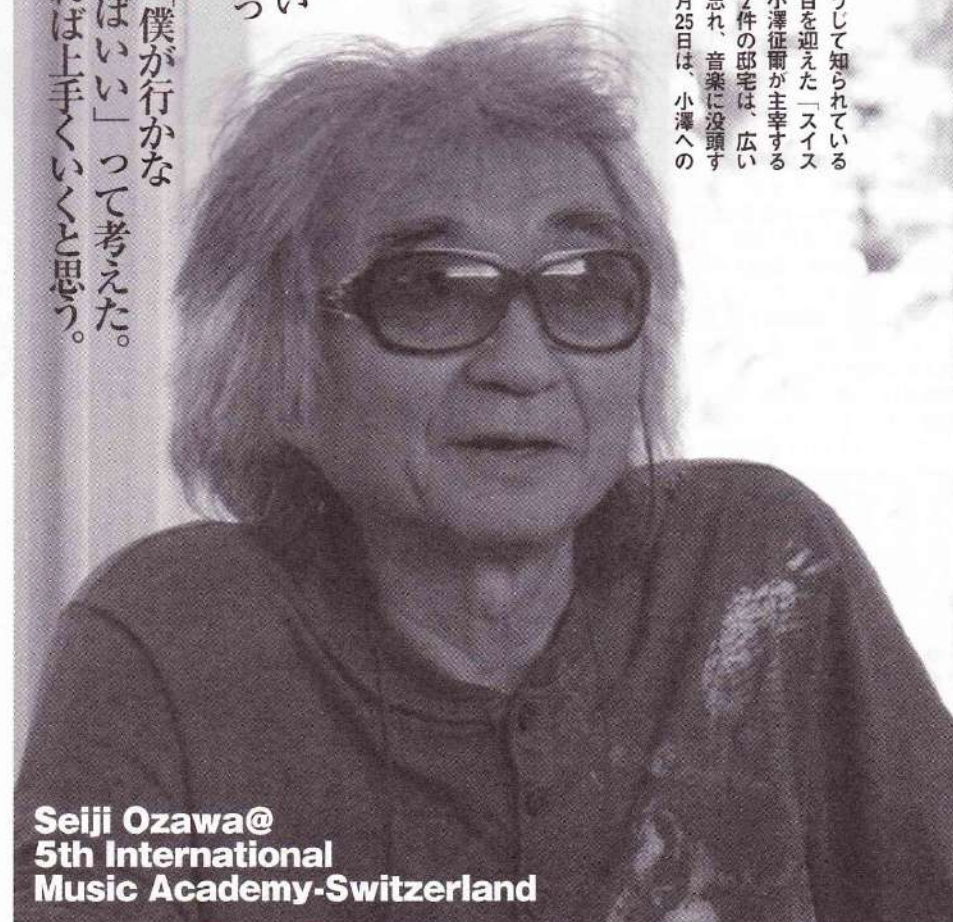
奥志賀でもスイスでも上手い  
ったから、中国でやるうと思っ  
たんですよ。

そうしたらこれが大変。結局「僕が行かないで、向こうから来てもらえばいい」って考えた。言語などの基盤がちゃんとすれば上手いと思う。

ドがあるスキー学校の宿舎で始めたんですよ。そうしたらすごい良くて。それで、僕がウィーン国立劇場と契約した時に、「ヨーロッパでもやらないか」って言われたの。でも、なんとなくどこで始めていいか解らなくてね。そこに、フランシエとオリヴィエ(現IMASプレジデント兼アーティスティック・ディレクター)が「スイスでやらないか」って、僕のところに来たの。「ああ、スイス

っていいのは中立でいいなあ」と思ってた。ウィーンとかベルリンとか、大きな街でやると、その音楽学校なんかと密接になっちゃうでしょ。先生もほとんど奥志賀と同じ。原田禎夫がチーフで、その仲間がパメラ・フランク、今井信子、一番トップにロバート・マンっていうおじいちゃん。弦楽四重奏の神様みたいな人なのね。僕は昔から好きで、本当、間のいいことに、奥志賀始めて「彼、来てくれ

ないかなあ」って思っていた時、彼はジュリアード音楽院で50年弦楽四重奏を教えて、辞めたんですよ。その最後の音楽会っていうのをタングルウッドでやったの。僕、その時のパーティに出ている、「僕、こういうのやってんだけど、あんた来ないか」って言ったら、その場で「行く！」って言うてくれて、もう何年も来てるんですよ。



Seiji Ozawa@  
5th International  
Music Academy-Switzerland



賀の日本人学生と、ロールの欧米の学生の違いはどこですか。

○ 日本人のよさはね、本当に民主主義なのよ、何でも合議制。合議しなくても、最後に新橋の居酒屋行って、みんなで酒飲みながらいろいろ、仲間で決めたりね。そーいう意味での横のつながりはすごくいいの。自分を殺してでも、みんなと合わそうとする。ところが音楽っていうのは、それが強くなっちゃダメ。それがなきや、またダメなんだけど……。ヨーロッパはそれが全然ない人間もいる。こっちの人間はよく言えば「個」、悪く言えば「我」が強いんですよ。それから、先生に対してもそれがあって、僕らが言ったことも、すぐその場で真似しないで、嫌なら嫌って顔するし。日本人は絶対、嫌って顔しないからね。中国人も、韓国人も我が強い、今。だから日本人の特性かもしれないね。

### アンナ・ネトレプコは「音楽塾」の宣伝係(笑)

——奥志賀とロール、そして音楽塾の3つは、どのように関連付けられているのでしょうか。

○ 音楽塾はオペラをやるうと思ったから。日本は学生がオペラをやる場所がないから。外国からオペラが来るようになって、字幕が発達したり、DVDで事前に研究できたりするんで、うんとオペラファンが増えただけでも、音楽学校でオペラを教えるのはまだ弱かったからね。僕だってカラヤン先生に言われてオペラ始めたんだから。でも僕はピットに入っているの、舞台の上にいる歌手たちに教える技術も時間もないから、歌い手はほとんど外国からいいのを呼んで来て、カヴァーキャストを全部日本人にして、そーいうやり方で歌い手も育てようとしてるんだけど、案外うまくいってるとは思わなかった。お客さんには申し訳ないけど、少し高い切符を買ってもらってね。アンナ・ネトレプコってロシアのソプラノがいるでしょ。《ボエーム》のムゼッタで来たんだけど、彼女は音楽塾の宣伝係(笑)。日本に行く、「セイジがやってるアカデミーが素晴らしいよ」って



盟友、原田禎夫と

言ってくれるんで、歌い手が来たがる。プリン・ターフェルも来るようになってたんだけどね、9・11のテロで、奥さんが「飛行機に乗っちゃ困る」って言って、ドタキャンされたんだけど、あいつは来るつもりになってた。それも、音楽塾に来たかったわけ。ただのオペラをやりに来るんじゃない。

——今後はどのように発展していくのでしょうか？

○ 僕のこれからの仕事は後継者を探すことです。サイトウ・キネンでも、候補者呼んで、みんな仲良くなれるようになっていくのを、もう何年も前からやってるんですよ。

音楽塾も僕がいなくなった後、消えちゃうんじゃないかってないから。ロームがお金出してくれていて、「名前を残してくれば、基金を作って続けられるようにする」って言うてくれるからね。後継者、なかなか簡単にはいかないですよ。適任者がいたら、外国人でもしょうがないかもしれない。サイ

トウ・キネンも含めて。本当はね、日本人にやつてもらいたいと思うけど、今、外国でうんと売れてる日本の指揮者は「帰って来る暇ない」って言うかもしれない。

——奥志賀からアジアに向けてプロジェクトを発信されると伺いましたが……。

○ 本当に野望なんだけど、奥志賀でもスイスでも上手くいったから、中国でやるうと思っただけですよ。そうしたら、これが大変。まずね、相棒を探さなきゃならない。僕のことを受け入れてくれて、スポンサーもあって、音楽を愛して、教育に熱心な人。僕も大きな街は嫌でね。上海とか北京ではやりたくないし、音楽学校とくっつきたくない……。それで結局一僕が行かないで、向こうから来てもらえばいい」って考えて、この間も先生たちに東アジアへオーディションに行ってもらって。問題は言語なんだけど、基金がちゃんとしてたら、このロールのIMASみたいに上手くいくと思う。それで、生徒たちが帰っていったら、「ああ、なるほど。あそこで教育された人たちはいい」ってなれば素晴らしい。だから時間はかかりますけどね。

——ありがとうございます。



# 5th International Music Academy -Switzerland

取材・文 中東生  
Text Shinobu Nakai

## 第5回スイス国際アカデミーで「術後、指揮デビュー」 世界中から集まった俊英26人による室内楽を今井信子、原田禎夫、小澤征爾ら講師が指導！

小澤征爾の音楽教育に注ぐ情熱は、世界に平等に向けられているようだ。インタヴューを終え、一旦生徒の中に入ると、同級生のように溶け込んでしまうマエストロ。生徒たちは、午前中の自主練習を終え、ピユッフエ式の昼食を講師と同じ部屋でとり、午後は講師が入ってくるのを部屋で待ちながら、練習を続ける。26人の参加者が6つの弦楽アンサンブルに分かれて稽古をしながら、実は、講師たちは同時に、終了コンサートのコンサートマスターを誰にするかなども目を光らせている。

この日は事件が起きた。一番大きいブラームスの六重奏団のヴァイオリニストが、他の



今井信子によるアカデミーでのレッスン風景 (6月25日)

オーディションを受けに行ってしまう、5時までの間、残りの5人の練習にも身が入らなかった。しかし他の部屋では、それぞれのやり方で練習していた。ドビュッシーの四重奏団には青谷友香里らが、メトロノームを片手に、音程を研ぎすます自主練習中。バルトークの四重奏団には日本の木嶋真優とフランス人のヴァイオリンに韓国人のヴィオラとフランス人で兄弟参加のチェリスト。講師の原田を中心、部屋全体が熱気を帯びていた。ベートーヴェンの四重奏団では今井さんの緻密なレッスンが繰り返される。注目株の1人であるフランス人のヴァイオリニストは、弦が切れるほど白熱するも、ドイツ人のチェリ



原田禎夫、小澤征爾によるクアルテットのレッスン風景 (6月25日)

ストの体温は低く、「清潔で規則正しい病院のような音」と言われてしまうほど。呼吸がらくるフレージングやアクセントを効果的に使う方法などを辛抱強く指導する。モーツァルトの四重奏団には、15歳のポリネシア系フランス人ヴァイオリニストがいる。チェリストの兄と参加しているが、音楽学校に入学したばかりです。注目の的らしい。もう1人のヴァイオリニストはオーストラリア人、韓国人のヴィオラにポーランド人のチェリスト。原田は、何度も彼のチェロを借りて、言いたいことを伝える。今井は自分のヴィオラを抱えながらレッスンをしている。やはり音楽に勝る言葉はない。スコア



受講生一人一人の質問に丁寧に応える小澤 (6月25日)

を抱えて入って来た小澤は、2人のヴァイオリニストの間にちよこんと座り、食い入るように、みんなの顔を見ながら音楽に耳をすます。その顔は真剣そのもの。まるで初めて目にするものを見た子供のような顔は、その集中力に満ちあふれている。チェロ奏者の音に「抜けるんだよね」と、両講師は即同意。「モーツァルトは音と音の間に隙間が空いてはダメ」と指導。また、ヴィオラの連続音符を、リズムによる音の強弱をつけて、テンポをコントロールする技術なども聴かせてみせる。他には、「同じ印象のフレーズを絶対繰り返さないのがモーツァルトの掟」と、センテンスごとに、違った色合いを求めたり、ソットヴォーチェの時により密着した音を欲したりと、色彩にもこだわる。

シューベルトの四重奏団では、もはやそのような技術的な話はほとんど出ず、それぞれのバランスや、弓の運び方の別の可能性を探ったり、レッスンではなく、音楽を一緒に作り出していた。連続参加のポーランド人とロシア人のヴァイオリニストに、オランダ人のヴィオラと仏人のチェロも素晴らしい。ロシア人は1歳2カ月の息子を連れての参加であるが、情景が浮かんでくるような、語りかけてくるような彼女の音色には圧倒された。それでも、「チャイコフスキーにはいいけれど」とタメ出しが飛ぶ。

夕飯の後、地元住民へのご挨拶を兼ねて、湖沿いの古城でコンサートがあった。手術後の小澤は「術後デビューだから、まだ1時間しか指揮できないよ」と心配そうに、だが、楽しそうに、アカデミーを後にした。小澤の体から発せられるとてつもないエネルギーが国境を越え、世代を越え、受け継がれていく姿を目の当たりにした。